

51 いつ来てもライオンバスに乗りたがる  
ライオンバスがそんな好きか

小紋潤

おそらく何度も来ているのだろう。「いつ来ても乗りたがる」幼子に理由はいらない。純粹にバスが好きで乗るのが楽しくて、ただそれだけ。一方で大人は理由を求め、どこが好きなの……?しかし幼子に理由はない。ライオンバスがあれば乗りた

い。ただそれだけ。幼子と大人の差は大きい。男親は悩み葛藤する。そして何度も通い、時間の経過と共に自分を納得させる。認めるというより受け入れざるをえないという感情がある。「そんなに好きか」からはそういう男親の気持ちが進み出ている。

52 風落ちて鳶啼く声が呼び戻すデラシネ  
のごとき吾の歳月 桐谷文子

風がある時、鳶は何処へなりと自由に飛んでゆく。ほとんど羽ばたかず気流に乗れば輪を描きながら高く舞い上がる。視界のよい晴れた日は空を旋回する鳶を見かけける。しかし風がやんだ時、鳶は自由に飛ん

でゆけなくなる。鳶の旋回がやむときのなれどもいわれぬ瞬間。自由を失った鳶が発する啼く声。その鋭くしわがれた哀しげな声。その声がデラシネのような吾の歳月を、作者に呼び戻すという。それは鳶のように自由に飛び回っていた若い頃の作者へのあこがれなのだ。

53 会ひみてののちの心はいつしんに三十  
余年恋ひつつ憎む 田中薫

敦忠の「あひみての後の心にくらぶれば昔はものを思はざりけり」が下敷き。思ひかなって初めて相手の女性に逢えた翌朝に詠んで送った和歌。敦忠の心優しい純な貴公子の姿が目の前に浮かんでくるようである。それに対して「会ひみてののちの心」を分析した作者の歌には、具体的な心理が描かれていて面白い。「思はざりけり」という詠嘆に対して、心理学用語でアンビバレントという相反する二つの感情や態度を「恋ひつつ憎む」と言い切ったところに

54 待ちをれば夕べ淡雪ふり籠めて駅は明  
三十余年の心の強さを感じる。

かりの鳥となりたり 奥山かほる

淡雪が夕べには降り籠めて、外出困難ほどとなっている。春先のふわふわとした消えやすいぼたん雪は、日暮れとともに駅を包み込む。しかしそれは厳しい冬の情景ではない。駅はいつしか明かりの灯る島のようになっていた。その時間の経過を「なりたり」という完了・存続の意味の助動詞が表す。それでは作者は何を待っているのだろうか。「淡雪」は、春の兆しをもたらすもの。作者は、淡雪が包み込む駅を明かりの島とみて、そこに春の訪れと幸福な気持ち思い浮かべているのであろう。

55 葉禍にて尾部膨らませ歪む背の切り身  
となれば見分けのつかず 加賀谷実

スパーでは、魚が「切り身」で売られている様子をよくみる。魚屋に行くことも少なくなり、消費者は魚の大きさや形・色を知らずに食べることが多くなる。それはその魚の本当の姿を見ないことでもある。消費者にとり「切り身」は便利で楽な反面、その全体像を見なくなるという怖さがつき